

あずまのはなげんじすごろく
■東京花源氏雙録の解説

東京花源氏雙録（あずまのはなげんじすごろく）という題名から察するに、平安時代の京の源氏物語を、当世（幕末）の江戸に見立て、想像力豊かに描いた双六だ。

「歌舞伎登場人物事典」（白水社）の 664 頁の記載によれば、「歌舞伎で源氏物語が初演されたのは昭和 26（1951）年 3 月、船橋聖一脚本によるもので・・・」とある。とすれば、本双六は源氏物語絵巻や浮世絵の影響を受けているものであり、江戸風、侍風に脚色されている。殿様、傾^{かぶ}いた若侍、法師、奥女中、お姫様たちが登場し、光源氏と思われる人物が、色々な女性と絡む場面も多い。若紫にちょっかいを出そうとする光源氏のマスもある。奔放で躍動感のある絵双六だ。登場人物の豪華絢爛な着物にも注目したい。十二単も丹念精緻に描かれている。

振出しは、料紙を広げた文机に向かい、湖面に映える月を眺めているのは紫式部か。石山寺の土佐光起作の「紫式部図」を想起させる。源氏物語 5 4 帖のうち 2 4 帖が取り上げられており、それが振出しと上りを除く 1 2 のマスに描かれている。つまり、2 1 マスに 2 帖ずつ描かれている。サイコロの出目に従って、コマを進める飛廻り双六であるが、1 マスに 2 個所の行き先の指示がある双六は珍しい。

源氏物語は一部 1 ～ 3 3 帖、二部 3 4 ～ 4 1 帖、三部 4 2 ～ 5 4 帖の三部構成であるが、本双六においては、一部（帖の数は 2 0）、二部（帖の数は 1）、三部（帖の数は 3）となっている。名場面の多い第一部を主とした双六の構成だ（(双六の構成は P 2 参照）。

■東京花源氏雙録の構成

紅葉賀 うつせみ	上り	若紫 末つむ花
薄雲 すずむし		うきふね かげろう
梅ヶ枝 匂宮	桐つほ ははき木	須磨 明石
蓬生 みおつくし	あほひ 夕かほ	関屋 絵合わせ
はなのゑん 花ちる里	ふりだし 一はなのゑん 二かがり火 三絵合わせ 四ほたる 五花ちる里 六みおつくし	かがり火 ほたる